

＜サマー・ナイト／リッチー・バイラーク＞

リッチー・バイラークは日本と縁の深いピアニストである。初来日はスタン・ゲッツ・カルテットでの1973年。2度目は75年で、この時は自己のトリオでの来日だった。滞在中にアルバム『メソースラ』(Trio→P.J.L.)を吹き込んでおり、これが日本制作の第1弾となった。バイラークの初リーダー作『EON』(74年)を制作した独ECMの日本での販売会社がトリオレコードだった関係もあり、同社は80年代初めにかけて積極的にバイラークのアルバムを制作。レギュラー・ベーシストだったフランク・トゥーサとの『サンデイ・ソング』、ビル・エヴァンスとの共演で知られるジェレミー・スタイグを迎えた『リーヴィング』、日野皓正、増尾好秋との日米交流作『ザル』、盟友デイヴ・リーブマンと語らった『オマーク』、81年東京でのステージを取めた『ソロ・コンサート』等、10タイトルに及ぶ。中でも『エレジー・フォー・ビル・エヴァンス』(81年)はバイラークの評価を決定付けた、トリオの名作として知られる。これらのアルバムに共通するのは、ソロ、デュオ、トリオといった少人数によるものがほとんどだということだ。これはバイラークの音楽性を物語る重要なポイントだと言える。現在に至るまで、3管グループやビッグ・バンドのようなリーダー作とは無縁であるのは、音楽的にも人間的にも近しいと感じられるミュージシャンたちとの共同作業に重きを置いているから。初レコーディングから30年以上もの間、このポリシーを貫いてきたバイラークは、同じくらしい期間活動している他のピアニストと比べて、特異なポジションにいることは明らかだろう。

80年代はリーブマンらと結成したクエストや、＜ライヴ・アンダー・ザ・スカイ＞で毎年のように来日。96年の『スノー・レバード』(Alfa Jazz)を経て、バイラークが選んだ日本のレーベルがヴィーナスレコードというわけである。99年録音の①『恋とは何でしょう』はスタンダード・ナンバーを中心に、再演曲となる「リーヴィング」[「ナーディス」]で構成。以降マイルス・デイヴィスとビル・エヴァンスのレパートリーが興味をひく②『ロマンティック・ラブソディ』、シューマン、ベートーベン、ショパン、ドビュッシー等をジャズ・トリオにアレンジした③『哀歌』、ビリー・ストレイホーン、ジョン・コルトレーン、ウエイン・ショーター曲をカバーし、それまでのキャリアを総括した自信作④『マンハッタン幻想』と、4枚のアルバムをリリースしてきた。これらのうち①②④はバイラーク+ジョージ・ムラツ(b)+ビリー・ハート(ds)とのトリオ作で、③は同トリオに2曲のみグレゴール・ヒューブナー(vln)が参加した編成。そして今回リリースされる本アルバム『サマー・ナイト』も不動のメンバーによるトリオ作だ。

このトリオの活動歴は30年を超える。レコーディング上ではバイラークとムラツが初めて共演したのが、ジョン・スコフィールド『ライヴ』(77年、Enja)というのは興味をそそられる。ムラツとは70年代の代表作となった『ELM』や、『アーケード』『アパークロンビー・カルテット』『M』といったジョン・アパークロンビーのECM吹き込みでも引き続き共演を重ね、最良のパートナーシップを築いた。ここで面白いと思うのは、ムラツとハートが前述のようなバイラークの行き方とは違うキャリアを歩んできたことである。ムラツはチェコスロバキアに生まれ、60年代後半パークリー音楽院入学のため渡米し、そのままブロ入り。オスカー・ピーターソン、サド・ジョーンズ〜メル・ルイス楽団、スタン・ゲッツの他、トミー・フラナガンやハンク・ジョーンズのトリオで重用されたフリーランサーとして、誰もが認める実力者だ。ワシントンDC生まれのハートはウエス・モンゴメリー、ハービー・ハンコック、マッコイ・タイナー、ファラオ・サンダース、ギル・エヴァンスら様々なタイプのミュー

<b>Summer Night</b>
サマー・ナイト
<b>Richie Beirach Trio</b>
リッチー・バイラーク・トリオ
<b>1. サマー・ナイト</b>
<b>Summer Night</b> 〈H. Warren〉(4:58)
<b>2. オール・オブ・ユー</b>
<b>All of You</b> 〈C. Porter〉(7:39)
<b>3. ソラー</b>
<b>Solar</b> 〈M. Davis〉(5:40)
<b>4. メモリーズ・オブ・ユー</b>
<b>Memories Of You</b> 〈E. Blake〉(5:53)
<b>5. オール・ブルース</b>
<b>All Blues</b> 〈M. Davis〉(6:18)
<b>6. シシリアーノ</b>
<b>Siciliano</b> 〈J. S. Bach〉(6:02)
<b>7. アイ・リメンバー・ユー</b>
<b>I Remember You</b> 〈V. Schertzinger〉(6:48)
<b>8. インプレッションズ・インティマス</b>
<b>Impressions Intimas No.1</b> 〈F. Mompou〉(5:25)
<b>9. マイルストーンズ</b>
<b>Milestones</b> 〈M. Davis〉(5:19)
<b>10. ソー・ホワット</b>
<b>So What</b> 〈M. Davis〉(5:25)
<b>リッチー・バイラーク</b> Richie Beirach 〈piano〉
<b>ジョージ・ムラツ</b> George Mraz 〈bass〉
<b>ビリー・ハート</b> Billy Hart 〈drums〉
録音：2007年9月4、5日　ザ・スタジオ、　ニューヨーク
<span>Ⓒ</span> <span>©</span> 2008 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.
*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on September 4&5, 2007
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover: (c) Christie’s Images / Corbis
Artist Photos：Mary Jane Photography
Designed by Taz

ジシャンとの共演歴を誇る、オールマイティのベテラン。つまりムラツもハートも共演者を選ばない音楽性の特徴でもあるわけで、そんな2人が“限定派”のバイラークと近い関係を築いてきたのは不思議な気もする。生年はバイラークが47年、ムラツが44年、ハートが40年と、全員が1940年代生まれという共通点があり、同世代だからこそ共感できる部分があるのだろう。バイラークはライブ Tchヒの音楽学院で教鞭をとるため、2000年にドイツへ移住しており、これらヴィーナスによるニューヨーク・レコーディングが、彼らのリユニオンの良机機会となっていることは見逃せない。

ヴィーナスでの通算第5作となる『サマー・ナイト』は、これまでのアルバム同様、大きな特色がある。全10中4曲がマイルス・デイヴィスのナンバーで、レパートリーだった有名曲も含めると半数がマイルス関連の選曲ということになる。80年代からバイラークが好んで演奏してきた「ブルー・イン・グリーン」はマイルスとエヴァンスの共作だし、バイラークに最大の影響を与えたエヴァンスは50年代後半にマイルス・バンドに在籍してモダン・ジャズの新しい扉を開く最大の功労者となったVIP。そう考えるとバイラークはハードバップから新たに転換したジャズ・スタイルに、創作のモチーフを得ていることがわかる。コルトレーン追悼プログラムの＜ライヴ・アンダー〜＞に出演したのは、もちろんコルトレーンから多大な音楽的インスピレーションを得ていることを示す。「私にとって今回のアルバムはマイルス・デイヴィスの『カインド・オブ・ブルー』と同じような作品になったと思っている」と『マンハッタン〜』について語ったバイラークのコメントを踏まえれば、この新作は前作をさらに

押し進めたアルバム・コンセプトだと言えよう。

「サマー・ナイト」はハリー・ウォーレンが書いたスタンダード。ここではチック・コリア・ヴァージョンを想起させるアレンジを使用しているが、バイラーク・トリオはさらにダイナミックにドライブする演奏が迫力満点だ。後半に進むとアフロ・キューバン風の展開に。前作に引き続き、エネルギーな近年のバイラークを象徴するトラックだ。「オール・オブ・ユー」はミュージカル『緞の靴下』に挿入されたラヴ・ソング。ピアノ・トリオではビル・エヴァンスとキース・ジャレットのヴァージョンが有名だ。ここでは冒頭のピアノ独奏によって、かつて“70年代のエヴァンス派筆頭格”と呼ばれた片鱗を聴かせる。バイラークはエヴァンスやキースとは異なるメディアム・テンポに設定。ベース・ソロをフィーチャーし、重厚なトリオ・サウンドに仕上げている。「ソラー」は前述の『エレジー〜』にも収録されたマイルス・デイヴィスのナンバー。50年代マイルス・クインテットの「ディア・オールド・ストックホルム」のイントロを借用したアイデアが面白い。この一節をリビートすることで曲全体を太い柱が貫く格好になった。フィニッシュも見事。ユービー・ブレイク作曲の「メモリーズ・オブ・ユー」は、本作で最も意外性のある選曲かもしれない。そこはかとなくノスタルジーを感じさせる原曲のメロディーがまず提示される。続くピアノ主導のパートでバイラークは、敢えて音数を抑えた演奏に終始。このアプローチはブレイクと言うよりも、この曲をレコーディングしているセロニアス・モンクへのオマージュではないだろうか。過去にバイラークとモンクの接点がクローズアップされたことはないと思うが、バイラークの隠れた音楽性を知るようで興味深い。「オール・ブルース」はマイルスのオリジナル・ヴァージョンを大胆に変更。60年代のレイ・ブライアントを想わせるアーシーなアレンジだ。途中倍テンポになり、さらに楽曲を発展させるのもいい。後半でドラム・ソロを演じるハートが、バンドに強力なエネルギーを注ぐ。ソウルフルなエンディングは、この時のレコーディングがいかに好調に進行したかを物語る。「シシリアーノ」はクラシック

好きのバイラークらしさがうかがえるバッハのナンバー。有名なメロディーにジャズ的な味付けが加えられ、テンポ・アップした瞬間にスイッチが切り替わるのが聴きどころ。短い冒険の旅を終えたトリオは、楽曲を静かに締めくくる。チャーリー・パーカーやチェット・ベイカーの名演がある「アイ・リメンバー・ユー」も、バイラークのイメージからすると意外な選曲。メロディー楽器としてのベースをフィーチャーすることによって、バイラークらしさを発揮している。「インプレッションズ・インティマス」はムラツ参加作『Round About Federico Mompou』(2001年、ACT)の再演曲。モンボウが最近のバイラークにとってお気に入りの作曲家であることは、ファンならご存知のはず。哀愁を帯びた旋律と内省的な曲調は、バイラークのバックボーンとなっている音楽性に重なるものであり、モンボウの楽曲を好んで取り上げることも納得がいく。「マイルストーンズ」はマイルスのオリジナル・ヴァージョンよりもやや遅いテンポでスタートする。「A列車で行こう」「ア・フォギー・デイ」等、スタンダード・ナンバーの一節を次々に繰り出すバイラーク。やはりこのセッションでノッていたことを証明している。「ソー・ホワット」は通例よりもかなりアップ・テンポでの演奏。あるいはこの曲の初演からしばらく経ったライブ録音作『フォア&モア』でのマイルスを踏襲したテンポ設定なのかもしれない。ドラム・ソロを含む5分25秒を全速力で駆け抜ける。ドイツのライブ Tchヒに移住したため、限られたタイミングでしか会えない旧友たちと、ここぞとばかり情熱たっぷりに演奏した成果が本作に取められているのだ。

2007.12.14 杉田宏樹